

## 鎌倉谷〈かまくらだに〉（兵庫区道場町）

道場町の東南に、生野〈いくの〉という所があります。今の国鉄福知山線〈ふくちやません〉の道場駅〈どうじょうえき〉の付近です。駅や家のある所の裏がわには、武庫〈むこ〉川がながれています。その川下〈かわしも〉のほうへいきますと、六甲山から船坂〈ふなさか〉川が流れこんでいます。川は深い谷となっていて、緑〈みどり〉の木木が茂って美しい景色となっており、その崖〈がけ〉には、見上げるような高い岩がそびえていて、人びとはこの岩を、百丈岩〈ひやくじょういわ〉とよんでいます。それはこの岩が、ひじょうに高く、また岩の上も広くて、畳〈たたみ〉が百枚しけるといわれていたからです。

ところがむかしは、武庫川がその下まで流れて、そこに水の渦〈うず〉まく大きな淵〈ふち〉となっていました。そして一匹の河童〈かっぱ〉が住んでいたのです。ところがその河童は、なかなかの悪い奴〈やつ〉で、鶏〈にわとり〉や猫〈ねこ〉などをみると、淵のなかへ引きずりこんで、その血をすすって殺し、ときには牛や馬さえも引きずりこもうとしていたのです。だから村の人びとは、いつも、

「今にみとれ、ど河童〈かっぱ〉。頭の上の皿〈さら〉を、たたきめんだるわ。」

といって怒〈おこ〉っていました。それは河童の頭の上に皿がのっけていて、いつも水がたまっており、その水がなくなるか、また皿がこわれると、河童が死ぬといわれていたからです。



ところがある日のことです。この武庫川の川べりで、女の子をつれたお母さんが洗濯〈せんたく〉をしていました。すると、とつぜん、川の中からその河童があらわれて、女の子の手をひき水のなかへ引きずりこもうとしました。驚いたお母さんは、女の子をカーぱい引きながら、

「だれかきてー。河童が娘〈むすめ〉をさらおうとしているー。」

と大声でなんども叫びました。その声を聞いて大ぜいの人たちがかけつけ、河童に石をなげるやら棒〈ぼう〉でたたくなどしました。すると河童は、淵からするすると百丈岩にのぼり、下にいる大ぜいの人びとにむかい、「ここまでおいで。」といって、えへらえへらと笑いました。人びとは、ますます怒り、

「きょうこそは、あのど河童〈かっぱ〉をたたき殺してやる。」

といっているいろいろ相談〈そうだん〉していました。そこへ、年とったお坊さんがとおりかかり、

「どうしたのか。」と尋ねました。人びとは、

「あの河童には、みんな苦しんでいます。それできょうは、ぜひ退治〈たいじ〉してやろうと相談しているところです。」

といって、今までのことを話しました。これを聞いたお坊さんは、

「よしよしわかった。悪い河童だ。それではわたしが二度と悪いことをしないようにしてやろう。」

といって、岩の上をあおぎ、数珠〈じゆず〉を手にはさんでお経をあげました。すると、どうでしょう。河童の頭の水がサッとちったかとおもうと、河童はまっさかさまになって、淵のなかにドボンと水けむりをたてて落ちました。そうして間もなく浮かびあがり、お坊さんの方をむいて手をあわせ、

「もう悪いことはいたしませんから、命〈いのち〉だけはお助けください。」

といいながら、涙をぼろぼろながしました。するとお坊さんは、

「それでは助けてやろう。これからは二度と悪いことをしてはならぬ。もしたならば、頭の上の皿がわれるであろう。」

といって、人びとに軽〈かる〉く頭を下げて歩きかけました。驚いた人びとは、すぐにそのあとを追いかけて、

「お坊さま、ありがとうございました。お名前をおうかがいしたく思います。どこへおゆきになりますか。」

とたずねました。するとお坊さんはにっこり笑って、

「いやいや名まえなどいうほどの者ではない。この先きの清寥院〈せいりょういん〉にいく者じゃ。」

といってすたすたと去っていきました。人びとは、すぐにそのあとを追って清寥院にいき、和尚さんにお坊さんのことを聞きました。すると和尚さんはきょうに形をあらため、

「今きていらっしゃるお方は、もと鎌倉幕府〈かまくらばくふ〉の執権〈しっけん〉であった最明寺入道時頼〈さいみょうじにゅうどうときより〉さまだ。ただ今は鎌倉殿と申しあげているが、鎌倉殿は今、一人で国をまわられ、人びとのようなすをごらんになって、政治〈せいじ〉の悪いところをなおそうとなさってういれるのじゃ。」

といいました。これを聞いた人びとは大いに驚き、お坊さんのおられる居間〈いま〉の方をむいて手を合わせて拝〈おが〉みました。それから以後〈いご〉、あの河童は、ぜんぜん悪いことをしなくなりました。

村人たちは鎌倉殿に感謝〈かんしゃ〉して、この谷を鎌倉谷とよぶようになりました。今では鎌倉峡〈かまくらきょう〉とあらためられて、大ぜいの人々がキャンプやハイキングにきてにぎわっています。

